

---

# とあるアンチスキルの義理の妹

ぱっつあん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるアンチスキルの義理の妹

### 【Nコード】

N5449L

### 【作者名】

ぱっつあん

### 【あらすじ】

これは後に最強と唱われる一人のアンチスキルとチャイルドエラーの少女の物語です。

チャイルドエラーの少女が中心です

※主にチ

## プロローグ（前書き）

この小説は「とある悪魔が絶対能力者」の設定を少し使っております。

## プロローグ

ここは『学園都市』と呼ばれる能力開発を行っている都市だ。

ここは総人口230万人でその人口の約八割が学生が占めていることから『学園都市』と呼ばれている。

この『学園都市』では学生が超能力を使えるのだ。

さらにその中でも

無能力者（LEVEL0）  
低能力者（LEVEL1）  
異能力者（LEVEL2）  
強能力者（LEVEL3）  
大能力者（LEVEL4）  
超能力者（LEVEL5）

の六段階で分けられている。

さらにLEVEL5は学園都市には七人しかいない。

LEVEL0が結束し能力者を襲ったりする集団を無能力者集団—スキルアウトがいる。

さらにそんなスキルアウトや風紀の乱れを正すのが風紀委員—ジャッジメントの仕事だ。

そして置き去りと呼ばれる孤児—チャイルドエラーと言う存在もある。

チャイルドエラーは見つかった場合孤児院などに送られるのだ。

だがそんなチャイルドエラーを実験に使う科学者がいた。

チャイルドエラーをモルモットにして絶対能力者（LEVEL6）を造るための礎にしているのだ。

そして八年前にもそんな事があった。

一一一一八年前一一一一

とある研究所で一人の少女が機械に乗せられていた。

髪の色は茶色、目の色は水色ときれいな容姿をしていた。

しかし今はその瞳には絶望の色しか写っていない。

「さあ始めようか」

実験の管理をしている老人―双葉陣内が言った。

陣内が機械に手をかけた。

この少女はもう駄目だと諦めていた。

しかしいきなり研究室の壁が大きな音を立てて粉碎された。

「な、何だ!？」

陣内は驚いた。

そこにいたのはパワードスーツと言うには装甲が薄く人の原型をたもっている白いパワードスーツがいた。

そのパワードスーツの顔と胸の辺りに金の十字架が取り付けられていた。

「試作品にしてはなかなかだな」

パワードスーツは指を開閉しながら言った。

その声は二十歳に近い男性の声だった。

「アンチスキルだ。お前を拘束する。」

「アンチスキルだと！？警備員はどうした！？」

すると男は今通ってきた道を指差した。

そこには数十人の警備員が倒れていた。

「ば、ばかな…」

陣内は崩れ落ちた。

その陣内に男は手錠をかけた。

そして腰についていたベルトのナックルをとった。

すると白いパウードスーツが空気に散るように消えていった。

「さすが学園都市製だな。」

その男はいかにも軽そうな感じがするチャライ男だった。

しかしその瞳は真っ直ぐできれいなものだった。

「後は他に任せるか…」

男は首を慣らしながら呟いていた。

そして男は一つの視線を感じた。

振り向くとそこには実験台にされていた少女が上半身だけをあげて男を見つめていた。

「お兄さんは誰？」

少女は絶望が支配している瞳を男に向けながら聞いた。

そして男は自信満々に答えた。

「紅音也だ。えらくいい人だ♪」

紅音也と名乗った男を少女が見つめた。

「えらい人？なら僕を助けてくれるの？」

音也は少女の瞳を真っ直ぐに見据えた。

「うゝん…十年後にはかなりの美人になる気がするな…」

音也は少し考えどうするかを決めた。

「よし俺と来い。名前は？」

音也は聞いたが少女は首を横に振った。

「名前がないのか？」

少女は一回頷いた。

「じゃあ俺がつけてやる。そうだな…『紅優奈』。今日からそれがお前の名前だ。」

音也は少女に手を差し伸べた。

「俺と来い。優奈」

少女は音也の顔を見た後手を見つめた。

そして躊躇しながら手をゆっくりと音也の手を重ねた。

音也は優奈の手をしっかりとそして優しく握った。

「僕はあなたを信じていいの？」

「ああもちろんだ」

音也のたった一言で優奈の瞳から絶望が消え失せた。



「さあ物語の始まりだ。」

これが後にアンチスキル最強の白い戦士と呼ばれる『紅音也』と『紅優奈』の出会いだった。

## プロローグ（後書き）

紅音也は『仮面ライダーキバ』に出てくる人ですが別に転移したとかではありません。

最初から学園都市にいた設定です。

ちなみに白いワードスーツと言うのは『イクサ』です。

そしてこの小説は『とある悪魔が絶対能力者』が完結するまで多分更新しません。

『とある悪魔が絶対能力者』を見てから見てください！！

## 第一話（前書き）

この小説では龍牙は序盤でLEVEL5になります！！

それではどうぞ！！

## 第一話

「音兄いご飯出来ましたよお」

学園都市の紅家で真面目そうな少女の声が響いていた。

この少女は紅優奈。

八年前に双葉陣内の実験の実験体にされかけた少女だ。

今は十三歳になった。

「ああ待ってろ」

そう言ったのは八年前に優奈を実験から救った男、紅音也だ。

普段は学校の教師として高校に通っている。

家ではヴァイオリンの練習などをしている。

しかし女に甘くそして軽いと言うのが難点だった。

だが一度事件が起これば自分の身を省みず人々を助けている。

「音兄い今日はアンチスキルで集まりがあるんじゃないんですか？」

優奈はおかずを並べながら音也に言った。

当の音也は全く気にしていなかった。

「俺は優秀だから重役出勤だ」

音也はそう言うところ飯をゆつくりと食べ始めた。

今日はアンチスキルのパワードスーツの適合審査があるのだ。

八年前に音也が使ったパワードスーツの改良型らしい。

「早くしてくださいね。僕も学校があるから。」

音也ははいはいと適当に答えご飯をかきこんだ。

そして音也はスーツに着替えた。

優奈も学校があるため制服に着替えた。

優奈が通っているのは常盤台中学と言う名門校だ。

「音兄い早くしてください」

「今行くから待っていてくれ」

そう言った音也があくびをかみ殺しながら出てきた。

そして音也と優奈は道が違うため別れて目的地に向かった。

S I D E    優奈

音也と別れた優奈は常盤台中学に向けて足を運んでいた。

すると後ろからいきなり声をかけられ抱きつかれた。

「おっはー優奈っち!!」

この抱きついてきた少女は「月詠朱雀」と言う名前だ。

朱雀とは同じクラスの友達だった。

「おはよう朱雀さん」

朱雀の後ろから遅れて少年がやってきた。

「馬鹿かお前は迷惑だろ」

そう言ったのは朱雀の義理の兄の「虎王龍牙」だった。

顔は恐いが根は優しい人だ。

龍牙は柵川中学に通っていた。

「大丈夫ですよ龍牙さん」

龍牙はそうかと呟くと一緒に歩き出した。

龍牙は目つきは悪いが結構女性にモテたりするのだ。

「龍牙さんってどうして柵川中学に入ったんですか。龍牙さんならもっと他の名門校狙えたんじゃないんですか？」

優奈が言った理由は簡単だった。

龍牙は以前学園都市第四位の「麦野沈理」と互角の戦いをしたことがあった。

「いいんだよ。名門校はつまんねえからな」

龍牙はそう言うのと道が別だったため別れた。

「そう言えば今日って能力テストあったよね？」

「そうでしたね。では早く行きましょう」

そう言い二人は常盤台中学に向かって走り出した。

S I D E 音也

ここはアンチスキルの養成施設だ。

養成施設では新米のアンチスキルを鍛えたりする場所なのだ。

そして音也がついた頃にはすでに全員が揃っていた。

「紅、また遅刻じゃん？」

この女性は「黄泉川愛穂」。

年中ジャージ姿の爆乳の女性だ。

ちなみに音也と同じ高校で教師をやっていた。

「俺は優秀だからな。これくらい大目に見てくれ」

音也がふざけた調子で黄泉川に言った。

「適合者はいたのか？」

「まだわかんないじゃん」

黄泉川の話だと今までパワードスーツを使うことが出来たのは黄泉川を会わせても三人しかいないらしい。

さらに使えたとしても一分と保たないらしい。

それもそうだろう。

今まで使っていたものでさえも音也しか使えなかったのだから。

しかしパワードスーツを装着した後使用者にかなりの負担をかけることがわかり改良が加えられたのだ。

そして音也の番が回ってきた。

「まあ見とけて」

音也はベルトとナックルを受け取った。

SIDE 優奈



常盤台中学についた二人は体操着に着替えグラウンドに来ていた。

「あら紅さんと朱雀さんではないのですの？」

二人に声をかけてきたのはツインテールの少女の「白井黒子」だった。

「おはよう白井さん」

「おっはー黒子っち」

黒子はジャッジメントに所属している少女だった。

「白井さんはいくつだったんですか？」

「相変わらずのLEVEL4ですよ。」

黒子は空間移動の能力者だ。

空間移動系の能力者は珍しいだけでなく演算が複雑なのである。

「紅さんはこれからですか？」

「はい。」

優奈が答えるとプールの方から凄まじい音が聞こえた。

「相変わらずすごいですね。御坂さん」

「当然ですわ！」

御坂美琴は学園都市の頂点に立つLEVEL5の第三位の能力者である。

そこにアナウンスがあった。

「紅さんはお姉さまと同じプールで測定するみたいですの」

「では行ってきますね。」

優奈は黒子に告げると美琴が能力を測っている場所に向かった。

するとそこには巨大な剣を持つ龍牙がいた。

「龍牙さん何でここにいますか？」

優奈の声に龍牙が気づき振り向いた。

「何でもうちの学校じゃ測れねえんだとよ」

龍牙は疲れたように言っているが常盤台中学で能力テストをするだけでかなりの実力である。

「じゃあ待っててくれ」

龍牙はそう言って優奈から離れていった。

水泳台に乗り龍牙は剣を上から下に振り落とした。

その瞬間プールの水が真っ二つに両断された。

「測定結果、初速秒速1530m。結果LEVEL5」

優奈はその結果を聞いて驚愕していた。

（龍牙さんがLEVEL5！？すごいです！！）

優奈は龍牙に駆け寄っていった。

「すごいですね！！」

「まあな。これで俺も最強の仲間入りかな。」

龍牙がふざけていっていると美琴がいきなり話しかけてきた。

「アンタ私と勝負しなさい！！」

その言葉に優奈と龍牙はポカンとしてしまった。

「ちょっとアンタ聞いてんの？」

美琴が前髪から電撃をバチバチさせながら龍牙に言った。

しかし龍牙は逃亡していた。

美琴もそれを追いかけていってしまった。

「優奈さん準備してください」

測定係に言われ優奈は急いで水泳台に上がった。

「好きなタイミングで行ってください」

測定係の言葉を聞き優奈は深呼吸をした。

そして能力を発動した。

S I D E 音也

音也はベルトとナックルを受け取るとベルトを腰につけた。

そして数百人はいるアンチスキルのメンバーに言い放った。

「お前ら見ておけ。これが紅音也様の實力だ！」

音也はナックルを握った。

そしてナックルの平らなところに左の手のひらを当てた。

すると電子音が鳴り響いた。

『R E A D Y』

どうやら八年前のものとは格段に性能があがっていたようだ。

「イクサ爆誕!!」

音也はそう言いナックルをそのままベルトに装着した。

するとベルトから半透明の金の十字架が音也を包むように現れた。

音也を包んでいた金の十字架が晴れると音也は白い人型を保つパワードスーツに包まれていた。

「どうだ庶民ども!!」

音也は手を広げながらアンチスキルのメンバーを見た。

威張るだけあっていつになっても装甲が消えなかった。

適性検査の最低ラインは10分間装甲を装着していることらしい。

その時間に待てない音也はその場でシャドーボクシングを始めた。

しかし二人にはこの後に危険が待っているのだが知る由もなかった。

## 第一話（後書き）

感想待ってます!!

不定期的に更新します!!

## 第二話（前書き）

意外に早く更新出来ました！

紅優奈のキャラ紹介をあとがきでします！

それではどうぞ！？

## 第二話

SIDE 優奈

能力テストを終えた優奈は美琴と黒子と一緒に喫茶店に来ていた。

何やら学園都市の第三位にして常盤台のお嬢様である美琴にぜひとも会いたいと言う人物がいるらしい。

優奈は黒子に誘われて一緒に来ていたのだ。

どんな人が来るのかな？と楽しみにしながら優奈は美琴達と話していた。

「御坂さんはあの後龍牙さんと勝負したんですか？」

「していないわ逃げ足が速くて…」

どうやら龍牙の俊足に撒かれてしまったらしい。

「龍牙って虎王龍牙さんですか？」

優奈は何故黒子が龍牙の事を知っているか不思議だったので黒子に聞いてみた。

「どうして龍牙さんの事知ってるんですか？」

「何でって虎王さんはジャッジメントのエースですよ？」



黒子の言葉に感心していると美琴に会いたいと言った人物が来た。

その他にも二人いて一人は優奈の知っている人物だった。

「げっ！？ビリビリ殺人魔！？」

待ち合わせ場所に来た三人の内の一人は龍牙だった。

「アンタちょっと来なさい」

美琴はそう言って龍牙を喫茶店の外に連れ出した。

その後龍牙と美琴の鬼ごっこが始まったのは言うまでもない。

「白井さんあの人が御坂さんですか？」

頭に大量の花を乗せた少女が言った。

「何かイメージとちがうわね」

そう言ったのは髪を優奈よりも伸ばしている花の飾りがついたヘアピンをしている少女だった。

「紹介しますわ。ジャッジメントの同僚の初春飾利と…」

黒子が一人を紹介したがもう一人は知らない人だったため口ごもってしまった。

「佐天涙子です。LEVELLOです！！」

「（元気な人だなあ）僕は紅優奈です。」

一通り自己紹介を終えた四人はあっという間に仲良くなった。

すると優奈のケータイに着信が入った。

「どうしたんですか龍牙さん？」

「大変だ。銀行強盗が起こった。黒子を銀行によこしてくれ」

優奈は電話を切り龍牙に言われたとおり黒子を銀行まで連れて行った。

S I D E 音也

正式にパワードスーツの装着者に任命された音也は黄泉川と共に高校に来ていた。

ちなみにパワードスーツの名前は「イクサ」になった。

最近は夏休みが近いせいか浮かれている生徒が多かった。

それに音也は一応教師と言うことでクラスの通信簿を記入しなければならぬのだがあいにく音也は副担任の教師だった。

「紅ちゃん少しは手伝ってください」

「小萌先生はもっと牛乳飲んでください」

小萌先生とは身長135cmのランドセルが似合うような教師だ。

しかしそんな見かけをしているが煙草も酒もバリバリの先生だった。

「そんな事言うと先生泣いちゃいます…」

小萌は目に涙をためて音也に言った。

そして周りの教師達の視線が痛かった。

「紅く小萌先生の事泣かしたじゃん」

最後に黄泉川にまでそんな事を言われ結局手伝うことになった。

だが手伝おうと思った矢先にアンチスキルから電話がかかってきた。

「何の用だ？俺様は今忙しいんだ。後に…」

「銀行強盗が発生した。相手は八人しかも銀行の中にいた人々を人質にとっている。直ちに出勤しなさい」

へいへいとやる気のない返事をして音也は電話を切った。

「じゃあ仕事入ったから頑張るなよ小萌先生♪」

そして音也はナックルとベルトを持って銀行に向かった。

SIDE 優奈

銀行についた優奈達は龍牙と美琴のもとに向かっていた。

「龍牙さん、白井さん連れてきました!」

「待ったぜ白井。あれ何とか出きるか?」

龍牙が指差した方を見ると八人ほどの能力者達が人質をとっていた。

優奈は何故LEVEL5が二人もいて手を出せないのかと不思議に思っていたがやっと謎がとけた。

そして黒子と呼んだのはテレポートを使い人質を救出してもらっためだった。

「任せてくださいまし」

黒子はテレポートを駆使して銀行強盗に気づかれないように人質を避難させていた。

しかし何度も繰り返していればいつかはバレてしまうものだ。

「なんだてめえ!!」

「ジャッジメントですよ!!おとなしくしなさい!!」

黒子は銀行強盗の一人を気絶させた。

「白井さん危ない!!」

優奈が叫んだのと同時に念動力を使い銀行強盗の一人が黒子に鉄パイプを当てようとしていた。

しかしそれは黒子に当たらず何者かが蹴り飛ばした。

S I D E 音也

現場についた音也が最初に見たものはジャツジメントのツインテールの少女が人質を避難させているところだった。

テレポートを繰り返し人質をバレないように逃がしていたのだ。

しかし一人に気づかれてしまったらしく念動力を使った能力者がツインテールの少女を鉄パイプで殴ろうとしていた。

（仕方ねえ助けるか…）

音也は全速力で走り跳躍しながら鉄パイプを蹴り飛ばした。

S I D E 優奈&音也

優奈は鉄パイプを蹴り飛ばした人を見て叫んでいた。

「音兄い!？」

音也も優奈に気づいたらしくのんびり手を振っていた。

「あなた何者ですの？」

黒子は警戒の眼差しを音也に向けながら聞いた。

「紅音也、えらくいい人だ」

だが黒子に話している音也に銀行強盗の一人が炎の球体を放ってきた。

「危ない」

黒子の言葉は途中で遮られてしまった。

何故なら音也がナックルから出した衝撃波によって相殺された炎との音が全ての音を遮ったのだ。

そして音也は銀行強盗を睨みつけた。

「この世には嫌いなものが二つある。ピーマンと不意打ちをする奴だ」

そう言って音也はナックルの平らな部分に左の手のひらを当てた。

『READY』

電子音がナックルから響き渡る。

そしてそのナックルをそのまま腰のベルトに装着した。

すると音也はイクサになった。

「こいつアンチスキルの白い戦士か!？」

「ほお、俺はそんな風に呼ばれているのか…悪い気はしないな」

銀行強盗の一人が炎の球体を放ってきた。

それに対して音也は拳を叩き込んだだけだった。

そして音也は凄まじいスピードで近づき一気に二人を気絶させた。

「なかなか動きやすいな」

音也は指を開閉させながら呟いていた。

そして残った銀行強盗は逃げ出した。

その途中で佐天と初春を人質にとった。

二人は危険に巻き込まれないようにと龍牙と美琴に避難するように言われていたのだ。

しかしそれが裏目に出てしまった。

「おいてめえこいつを殺されなくなかったらパスワードスーツをとれ  
！！」

佐天を人質にとった男が佐天にナイフを突きつけながら音也に言った。

音也は渋々と言った感じでイクサを解除した。

「お前らいいのか？俺にだけ気を取られてても？」

音也は銀行強盗に向かって叫んでいた。

「なんのこー」

銀行強盗は途中まで言って言葉が出なくなった。

何故なら電撃をバチバチとさせている美琴がこちらを見ていたからだ。

さらに銀行強盗が見て驚いたのは優奈の体から不思議な黒いオーラが出ていたからだ。

それには事情を知らない佐天や初春も驚いていた。

「覚悟しろよ。僕の友達を傷つけようとしたことを後悔しなさい。」

優奈が手を一回パンツと鳴らしコンクリートの地面に触れると銀行強盗と佐天達を切り離すようにコンクリートが現れた。

「佐天さん、初春さんこっちへ!!」

二人が優奈達のところまで来ると優奈の黒いオーラが消えた。

そこに音也もやってきた。

「また使ったのか?」

「だって音兄い…」

二人が言い争っていると美琴が超電磁砲レールガンを放ち銀行強盗を一掃していた。



「おい優奈あれって…」

そこに黒子が話って入ってきた。

「あの方は学園都市の七人のLEVEL5の第三位、御坂美琴お姉様ですよ!!」

「やっぱり…」

その後駆けつけた他のアンチスキルによって銀行強盗は拘束された。

「優奈あいつの様子見てきてくれ」

「ええ」

「文句を言うな居候!!」

優奈ははーいと答えるとどこかへ走っていった。

SIDE 音也

「全く…」

音也がため息をつきながら帰ろうとすると黒子に呼び止められた。

「なんだ？チビッコ？」

「チビッコじゃありませんの。わたくし、白井黒子と申します。」

黒子は音也に自己紹介をした。

「先ほどはありがとうございました。」

へいへいと言って音也が去ろうとすると誰かの腹のなる音が聞こえた。

みんなが注目する先には美琴がいた。

「自己主張の激しいLEVEL5だ…」

音也はため息をつきながら四人の少女十一人の少年にファミレスに連れて行かれた。

S I D E 優奈

優奈はあるマンションのとある部屋の前に来ていた。

そしてインターホンを押した。

しかし誰も出てこない。

ドアノブを回したが鍵がかかっていた。

「あれ？おかしいな？」

優奈はもう一回インターホンを押した。

やはり誰も出てこない。

優奈は仕方なく何回もインターホンを鳴らした。

しかしやはり誰も出てこない。

「仕方ありません…」

優奈は一回手をパンツと合わせた後扉に触れた。

すると鍵が開く音が聞こえた。

そして中に入ってしまった。

「おじゃまします」

靴を脱ぎ部屋の中に入っていくと一人の人がベッドに寝ていた。

その人は白い、白い、白い人だった。

「なんで勝手に入ってきてんだア？」

その白い人は上半身だけを起こして優奈を赤い瞳で見つめた。

しかしその瞳には悪意や敵視をしている様子はなかった。

「いいじゃないですか。私たち友達じゃないですか。一方通行さん」  
アクセラレータ

優奈が話していた相手は学園都市の七人のLEVEL5の頂点に立つ能力者、一方通行だった。



## 第二話（後書き）

くれないゆうな  
【紅優奈】

身長：149cm

体重：？？Kg

瞳の色：水色

【能力名】

形状変化

：両手を一回合わせた後変化させたい物質に触れると自分が思った形状に変化させることが出来る。

LEVEL3の能力者

ちなみに変化させられるのはコンクリートが限界。

## 第三話

SIDE 優奈

「てェかお前はナンでずっと俺の家に来ンだ？」

一方通行は床に正座をして座る優奈にだるそうに聞いた。

「だってほっておいたら変な物しか食べないじゃないですか!!」

「なんだそれ…」

一方通行は疲れたとばかりにため息をついた。

そして冷蔵庫から缶コーヒーを二本取り出してきた。

「ほらよ」

一方通行は缶コーヒーを一本優奈に渡した。

「ありがとうございます。あれ？前飲んでいたのと違いますよ?」

優奈は缶コーヒーを飲む一方通行に聞いた。

「前のは飽きたンだよ」

優奈はふーんと頷き自分も缶コーヒーを開けて飲んだ。

「…苦いです」

「ブラックだからな。飲めねエのか？」

一方通行は優奈をちら見しながら言った。

「の、飲めますよ!!」

優奈は一気にブラックの缶コーヒーを飲み干した。

「まったく、あん時お前に会わなきゃこんな事には…」

――三ヶ月前――

一方通行は夜の街を缶コーヒーを片手に歩いていた。

袋の中には缶コーヒーいっぱいに入っていた。

そんな一方通行の前に鉄パイプなどの鈍器を持った集団が立ちはだかっていた。

「なんなんですかてめェら。」

一方通行は苛ついた感じに言い放った。

「てめえには死んでもらうぜ!!」

一人が叫ぶと一斉に殴りかかってきた。

しかし一方通行は動じない。

そればかりか上を見上げ月を眺めていた。

そこに一人の少女の声が聞こえてきた。

「何やってるんですか！！大勢で人を襲うなんて最低ですよ！！」

少女は一方通行の前に立ち鈍器を持った集団に言い放った。

「うるせえ餓鬼は引っ込んでろ！！」

少女はそれを聞くと仕方ないとばかりに手をパンツと叩いた。

そして手をコンクリートの床につけた。

するとコンクリートが集団を襲うように変化した。

それを見た集団は逃げ出した。

「ふう〜大丈夫ですか？」

少女は振り返り一方通行に聞いた。

「なんだお前？俺を学園都市最強の一方通行と知ってンかア？」

一方通行は少女に言い放った。

「そうだったんですか？私は紅優奈です」

「別に自己紹介したわけじゃねエンだよ」

一方通行はそれだけを言うと優奈の脇を抜け歩き出した。



だがそんな一方通行の隣に優奈は並び歩き出した。

「ついてくンなお前」

「いいじゃないですか。私たちもう友達じゃないですか」

「――今に戻る――」

優奈は立ち上がり台所に向かった。

「なにする気だア？」

一方通行は心配そうに優奈に聞いた。

「料理をするんですよ」

またかと一方通行はため息をついた。

別に一方通行が優奈の料理をまずいと思っている訳ではない。

ただ作る量が尋常でないのだ。

優奈が鼻歌を歌いながら料理する姿を一方通行はため息をつきながら見ていた。

S I D E 音也

音也は今五人の少年少女かによって財布が空になってしまっていた。

「おいお前ら食い過ぎだ：」

だが五人はそんな話を聞かずに五人で話の花を咲かせていた。

音也はため息をつきながら自分のドリンクバーを飲んでいた。

「そう言えば音也さんはなんで紅さんと一緒に暮らしているんですの？」

音也は黒子の質問に目を向けて答えた。

「兄妹だからだ」

「全然似てないですね」

龍牙が音也に頼んだ料理を食べながら言った。

「まあ兄妹つつても義理のだからな」

へーと意外に反応を示さない五人につまらないなと思いながら飲み物をすすっていた。

そこに誰かからメールが入った。

確認してみると小萌先生からだった。

「金は置いとくからちゃんと払って帰れよ。もう完全下校時間が近いからな。」

音也はいかにもアンチスキルみたいな言葉を残して小萌先生がいる学校に向かった。

S I D E 優奈

一方通行の前には尋常でないほどの量の料理が並べられていた。

しかし見た目と匂いは食欲をそそるものだった。

「どうぞ食べてください!!」

優奈はエプロンをしたまま一方通行に言った。

「一人で食えってかア？」

一方通行は箸を持ちながら優奈に聞いた。

「僕も食べますよ!!」

そう言って優奈も料理を食べ始めた。

何だかんだ言って一方通行は優奈の料理を残さず食べた。

「どうだった？」

「なかなかだな」

一方通行はベッドに再び体重を預けながら言った。

「それじゃまた来ますね」

「分かった分かった」

一方通行が適当に答えていたが優奈は気にせず一方通行の部屋を出て自分の家に向かった。

S I D E 音也

小萌先生に呼び出された音也は再び高校に来ていた。

すでに生徒は帰ったようで電気がついてるのは職員室だけだった。  
「どうしたんです、うわぁ!？」

音也は職員室の扉を開けるとしくしくと泣いている小萌先生に驚いてしまった。

「紅ちゃん…終わらないんです…」

音也は一回ため息をついて小萌先生と通信簿をつけるのを代わった。

音也が帰宅する頃には空は暗くなっていた。

S I D E 優奈&音也

「ただいま」

音也は疲れた体を動かして自宅に帰ってきていた。

「おかえり音兄い。いまご飯作ってるから座って待ってて」

音也はリビングにあるソファに腰を掛けながら優奈の料理する姿を眺めていた。

（家庭的だなあ…）

音也は優奈を見てそんな事を思っていた。

数分後、料理が出来上がりテーブルに並べられた。

さすがに一方通行に作ったほどの量ではなかった。

「僕はお風呂に入ってくるから食べててください。」

そう言って優奈はお風呂に向かっていった。

音也は優奈の作った料理を味わいながら食べていた。

しかし食べ終わっても優奈がお風呂からあがってこなかったため音也は朝風呂をする事にして寝てしまった。

「音兄いあがりましたよ」

数分後、優奈があがってきた。

そして音也が寝ていることに気づいて音也に毛布をかけて優奈も明日のために眠りについた。



## 第三話（後書き）

感想待ってます♪

#### 第四話（前書き）

何だか最後の方が適当でしかも無理矢理になってしまいました……

それではどうぞ!!



## 第四話

とある休日の日、優奈は常盤台中学に来ていた。

今日は佐天と初春が学舎の園に来ることになっていた。

二人が常盤台中学を見たいと言うことで待ち合わせ場所を常盤台中学にしたのだ。

「御坂さん、白井さん」

優奈はすでに集まっていた美琴と黒子に駆け寄っていた。

「すみません遅れてしまって」

「ううん大丈夫よ。私達も今来たところだから」

よかったあと優奈は息をただしながら言った。

優奈がついてから結構時間が経ったが二人はまだ来ていなかった。

「遅いわねえ」

「お姉様をお待たせするなんて」

「あっ来たみたいですよ？」

優奈が言った先を見ると佐天と初春がこちらにやってきていた。

そして佐天のスカートが何故か濡れていた。

理由を聞くと水たまりに滑って転んでしまったらしい。

「と、とりあえず着替えましょう。風邪引いてしまいますよ？」

優奈が言うともそもそうだとばかりに常盤台中学の更衣室に向かった。

着替えは常盤台の制服しかなかったため佐天には常盤台の制服を着てもらうことにした。

しかし何故だか初春がムスツとしていた。

「どうしたんですか初春さん？」

「ずるいです佐天さんばかり…」

どうやら初春も常盤台の制服を着たかったらしい。

優奈は苦笑いをするしかなかった。

着替えを終えた佐天と初春を連れて優奈達はケーキ屋に来ていた。

「佐天さんは何を頼むんですか？」

「私はチーズケーキって決めてるから」

佐天は選ぶのに時間はかかりそうになかったが初春がかなり悩んでいた。

「白井さん、龍牙さんは来ないんですか？」

「ジャッジメントの仕事があるらしいんですの」

残念ですと優奈が言っていると黒子と初春にも集まるようにと電話がかかってきた。

「初春さんの分テイクアウトしておくね」

美琴の言葉にありがとうございますと答えて二人は支部に向かっていった。

「あの御坂さん、優奈さん私ちょっとおトイレ行ってきますね」

そう言って佐天はトイレに向かった。

美琴と優奈もケーキと紅茶を頼み席についた。

しかしいつまで経っても佐天は戻ってこなかった。

「遅いですね佐天さん」

「ちょっと様子見に行きましょう？」

美琴と優奈は立ち上がりトイレに向かった。

トイレからは水道の水が流れる音が聞こえてきていた。

そしてトイレのドアを開けた。

すると佐天が水道のところで気絶していた。

「佐天さん!？」

「大丈夫ですか!？ 佐天さん!？」

二人は気絶している佐天に駆け寄った。

だが佐天を見た瞬間言葉を失ってしまった。

気絶した佐天を風紀委員室に運んだ。

佐天をソファーに横にしてお絞りを頭に乗せて上げた。

風紀委員室にいた龍牙から常盤台狩りについて美琴と優奈は聞いた。

「じゃあ佐天さんは常盤台の制服を着ていたがら狙われたんですか？」

優奈が龍牙に怒りをぶつけるように聞いた。

「そう言うことになるな。まあ怪我の方は大したことはねえが…」

龍牙がそこまで言う佐天が目を覚ました。

「あれ私どうして…？」

佐天が上半身だけを起こしてみんなの方を向いた。

そのとき頭に置いていたお絞りが地面に落ちた。

そして優奈達は佐天を見て大笑いを始めた。

事態についていけない佐天がおどおどしていたが初春に渡された鏡を見て絶叫してしまった。

「アハハッ：はあはあまさか眉毛が極太にプツ！？」

優奈達は佐天を見る度に大笑いをしている。

理由は佐天の眉毛がマジックによって極太にされていたからだ。

美琴や初春は普通に大笑いをし龍牙は何とか耐えようと必死に笑いをこらえていた。

黒子に至っては机をバンバン叩き大笑いをしていた。

「でも不思議ですね監視カメラには写っているのに本人には見えな  
いなんて」

初春が話を元に戻した。

さらに『書庫<sup>バンク</sup>』にも姿を消すことが出来る能力者を調べたが自分の  
姿が消せるほどの力の能力者には全員アリバイがあった。

完全に手詰まりになっていた。

「絶対に許さん私の眉毛をよくもおお！！」

佐天がいきなり叫び出した。

この行動にここにいた全員が固まってしまった。

「私犯人の姿を見たんです!!」

佐天が言い放つと黒子が本当ですよ!?と食いついてきた。

そして犯人候補リストを佐天に見せた。

すると前髪が長いお団子頭の少女を佐天が指差した。

名前は「重複美帆」と言う名前だった。

「ダミーチェック」と言う対象物を見ていると言うことを阻害する能力のようだ。

しかし自分の姿の認識を阻害出来ないと実験で出ているが被害者が言っているのだから間違いないだろう。

佐天達は重複を捕まえるために動き始めた。

重複は人目のつかないところで息を潜めているようだった。

そして優奈が重複を見つけ出した。

「こんにちは。透明人間さん?」

重複は優奈に見つかった瞬間能力を使い姿を消した。

「全く…そっちは行き止まりですよ!!」

優奈は一度手を合わせてコンクリートの床にふれた。

すると道にいきなり壁が発生してぶつかる音が聞こえた。

どうやら重複が進行方向を変えたようだった。

しかしそれが優奈の狙いだった。

「白井さん!!」

黒子が優奈を連れて次の位置に向かった。

そこにも優奈の能力を使い壁を造り出した。

それを何回も繰り返し重複の行動範囲を狭めるだけでなくある目的地に誘導していた。

そして遂に重複を追い詰めた。

そこには美琴や佐天がすでに待ちかまえていた。

「チェックメイトです」

優奈が重複に言うとうと重複がスタンガンを優奈に向かって放った。

しかし優奈は能力を使い重複の周りに壁を造り出し閉じ込めた。

「私の眉毛の恨みをおお!!」

佐天が何やら暴れていたが能力を止めるわけには行かないのでアンチスキルが来るまで佐天を美琴と黒子が羽交い締めをしていた。

「何だお前だったのか？」

「あっ音兄い!？」

駆けつけたアンチスキルは音也だった。

重複をつれて仲間のアンチスキルは帰って行った。

そして美琴達と別れ音也と優奈はある学生の家に向かっていた。

「上条さん？」

「そうだ。」

二人が話している間に上条さんとやらのアパートについた。

するとツンツン頭の学生と血だらけのシスターがいた。

「何があっただんだ上条!!」

「紅先生!？」

上条は音也が来たことに驚いていた。

「ひどい誰がこんな事を…」

優奈がつぶやくと誰かが後ろからやってきて言った。



「僕達魔術師だけど？」

## 第四話（後書き）

感想待ってます♪

## 第五話

優奈と音也は魔術師と名乗る男と対峙していた。

その男は赤の髪に黒装束の姿。

十本の指には銀色指輪がひかり眼のしたにはバーコードが刻まれていた。

「この子を傷つけたのは貴方なんですか？」

優奈は魔術師の目を見ながら問いかける。

「正確には僕じゃない。まあ神裂もここまでやる気はなかったんじゃないかな？」

あくまで平坦に話す魔術師を優奈は睨む。

そして魔術師が息をはいた。

「さっさと彼女を渡してもらえるかな？」

「嫌です。絶対に！！」

優奈はそう言い手を一回パンとならして床に触れた。

コンクリートの床は魔術師に襲いかかる槍のようになった。

しかし魔術師は簡単に避ける。

「音兄い、上条さんその子連れて早く逃げてください!!」

「だが……」

「早くしてください!ここは僕に任せて!!」

優奈が怒鳴るように音也に言うと言也は上条と少女を連れてその場から立ち去った。

「全く手間を増やさないでくれるかな?」

魔術師はイライラした感じに優奈に言う。

「あなたは誰ですか?」

「だから言っただろ。僕は魔術師。ステイルⅡマグヌスだ」

ステイルはくわえていたタバコをアパートの外に捨てた。

するとタバコの炎が広がりステイルの手に集まってきた。

「巨人に苦痛の贈り物をおおお!!」

ステイルは叫び手のひらに発生させた炎の球体を優奈に向かって投げた。

優奈は再び手を一回パンとならして床に触れた。

するとコンクリートの床は壁のように優奈の前に発生した。

炎の球体を防いだ優奈は反撃をしようとした。

（いない！？どこに！？）

しかしステイルの姿が消えていた。

「こっちだ」

声が聞こえた方に手を交差させて体を守るようにガードした。

その瞬間手を通じて痛みが優奈を襲った。

「グッ！？（いつのまに！？）」

優奈はステイルから距離をとり手を合わせコンクリートの床に触れた。

コンクリートの床は槍のように変化した。

そして優奈はステイルに槍を持ち突っ込んだ。

「素人が！！」

ステイルはコンクリートの槍を横から蹴り粉碎させ優奈を一回転してさらに蹴り飛ばした。

「うわっ！？」

優奈はステイルの蹴りをくらい数m吹っ飛ばされた。

だがすぐに体勢を立て直す。

「なんでもの子を狙うんですか？」

優奈は口の中が切れて出てきた血を手の甲で拭いながらステイルに聞いた。

「君に言うことは何もない。だから消えてくれ」

ステイルは再び炎の球体を優奈に放ってくる。

しかし優奈は今度は能力で壁を発生させるのではなく体勢を低くしてそれを避けた。

炎の球体を避けた優奈はそのままステイルに突っ込んだ。

「甘いな小娘！！【灰は灰に塵は塵に吸血殺しの紅十字】！！！！」

ステイルは両手に発生させた炎を十字架のように優奈に放った。

優奈は能力でコンクリートの壁を創り出し防いだか壁は粉碎されてその破片が優奈を襲った。

「このまま倒れててくれれば命まではとらないよ」

ステイルはタバコを取り出しながら優奈に言った。

「ふざけないでください…」

ステイルは優奈の言葉に眉をひそめた。

優奈はステイルを睨みながら立ち上がった。

「あの子をどうする気なんですか!!」

「回収するんだよ」

「回…収…:…?」

優奈はステイルの人をもののような言い方に驚いていた。

「そう回収だよ。あれはここにあってはならないものなんだよ」

優奈はステイルの言葉に完全にキレた。

「人間を何だと思ってんだ!!」

優奈は手を合わせコンクリートの床に触れた。

するとステイルの周りが変化してステイルに襲いかかった。

「【世界を構築する五大元素の一つ。偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を罰する凍える不幸なり。その名は『炎』その役は『剣』顕現せよ我が身を食らいて力となせ】  
!!!!!!」

ステイルが何かの詠唱をした。

するとステイルを捉えていた優奈の攻撃が巨大な炎によって防がれた。

そしてその炎は人の形に変化していった。

「魔女狩りの王、イノケンティウス。その意味は…必ず殺す」

イノケンティウスが優奈めがけて襲いかかってきた。

優奈も能力を使い応戦するがすぐに溶けてしまう。

そしてついにイノケンティウスは優奈に拳を振り落とした。

（やられる！？助けて…）

優奈は死を覚悟して目をつむった。

しかしいつまでたっても明確な死はやってこない。

優奈が恐る恐る目を開けた。

「なんなんですか？この状況は？」

そこには白い悪魔がいた。

SIDE 音也

音也は上条と少女を連れて走っていた。

「先生あの子は大丈夫なんですか！？」



音也は上条の問いに答えない。

「先生！！」

「うるさい！！」

上条は音也の叫びに体をビクツとさせた。

そして音也は立ち止まった。

「上条お前は小萌先生の家に行け」

「でも……」

「なんとも言わせるな！！」

音也は再び上条を怒鳴った。

上条は少女を連れて走り出した。

そして音也はとある人物に電話をかけた。

「力を貸してくれ！！優奈が大変なんだ！！」

「だったらテメエでなんとかしやがれ」

電話の相手は全く応じようとしなない。

「頼む……」

電話の主は何も言わずに電話をきった。

S I D E     ? ? ?

電話の主は音也からの電話を受けた後部屋を出た。

「仕方ねェ…」

電話の主は走り出して優奈のところに向かった。

その途中でアパートの一角で炎があがってることに気づいた。

そこには優奈と炎の巨人がいた。

「あそこか…」

電話の主は人間では有り得ない距離を飛び優奈の場所に向かった。

優奈のところについた電話の主は炎の巨人が振り下ろす拳に片手を当てて防いだ。

それに気づいた優奈は顔をあげた。

「なんなんですか？この状況は？」

「アクセラレータ一方通行さん？」

優奈を守ったのは学園都市第一位の能力者、アクセラレータ一方通行だった。



## 第五話（後書き）

感想待ってます♪

## 第六話（前書き）

一方通行のキャラが崩壊したかもしれません…

それでもいい人どうぞ…

## 第六話

優奈の目の前に現れたのは白い髪に白い肌の女のような容姿をした男。

その体にはほとんど筋肉がないように痩せこけているのにも関わらずその赤い瞳からは荒々しい殺気がみなぎっている。

その男の名は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>。

学園都市の七人のLEVEL5の頂点に立つ最強の男だ。

「何だお前は!？」

魔術師、ステイルⅡマグヌスは驚きを隠せずにいた。

自分の持てる力を使い発動した魔女狩りの王イノケンティウスが片手で防がれているのだ。

驚かない方がおかしいのだ。

「学園都市第一位の能力者、一方通行様を知らねエとは笑わす奴だなア」

一方通行は口が裂けるのではないかと言うほどの笑みを見せた。

それはまるで悪魔が笑っているようにすら見えた。

「どうして一方通行さんがここに…」

優奈は膝をつきながら優奈に背を向ける一方通行に聞いた。

「俺達はダチなんだろ…」

一方通行の表情は見えないが一方通行が初めて優奈の事を認めた瞬間だった。

そして一方通行はイノケンティウスを突き飛ばした。

「貴様何故イノケンティウスに触れて火傷の一つ目ないんだ!？」

スタイルが一方通行に言い放った。

そこで再び一方通行が笑った。

「ここで問題です。学園都市第一位の能力は一体なんでしょうか？」

「知るか!! 行けイノケンティウス!!」

イノケンティウスが再び一方通行と優奈を襲おうとした。

しかし一方通行の前ではそんなものは意味をなさなかった。

「正解はベクトルを操作する能力でしたア」

そう言って一方通行はイノケンティウスに触れた。

するとイノケンティウスが何かに弾かれたように炎の腕が破裂した。

だがすぐに再生してしまった。

「ヘエおもしれェな。それ」

一方通行は全く怯んだ様子を見せずにステイルを見据える。

「いかに学園都市第一位の能力者であろうと僕には勝てない!!」

ステイルは再び炎の十字架を放ってきた。

だが一方通行は避けるどころか動くそぶりも見せない。

そしてステイルの炎の十字架が一方通行を貫いた：

はずだった：

炎の十字架は確か一方通行に触れた。

だがそれからがステイルにとって信じられない現象が起こった。

一方通行にふれた炎の十字架はそのまま自分に向かってきたのだ。

「ぐわああああ!？」

ステイルは炎の十字架をくらしいのたうち回った。

「どォだ？自分の攻撃を食らった気分はア？」

一方通行は笑いながらステイルを見下しながら言った。



一方通行はベクトル操作を使いスタイルの攻撃を反射したのだ。

そしてそんな一方通行にイノケンティウスが襲いかかる。

「邪魔すンなよ。三下がアアア!!」

一方通行はイノケンティウスに向かって拳を当てた。

ベクトル操作によって一方通行には必要最低限の熱量しか通らないのだ。

そしてイノケンティウスを反射しようとした。

反射が作用してイノケンティウスの腕が反射され弾け飛んだ。

だがイノケンティウスの腕は弾け飛んだそばから再生して一方通行を襲う。

「チツめんどくせエ…」

一方通行はイノケンティウスに反射を使い続けるが意味を成していなかった。

「優奈、この階の下になンか変なモンがあったからそれはがしてこい」

優奈は頷いて下の階に向かった。

「やらせない! 行けイノケンティウス!!」

イノケンティウスは標的を一方通行から優奈に変えて突っ込んだ。

「だアれが行かせるッて言ったよォ？」

一方通行はイノケンティウスの前に立ちベクトル操作を使ってイノケンティウスの進行方向を逆にした。

「さアてテメエにはこれからの実験の準備運動を手伝ってもらうぜエ」

一方通行は不敵に笑った。

S I D E    優奈

優奈は一方通行に言われた通りに下の階に来ていた。

そこら辺一带にコピー用紙に何かが書かれたものが貼り付けられていた。

「これを全部はがせばいいのか？」

優奈はその一枚に触れた。

だが何も起こらない。

そこに音也がやってきた。

「優奈！無事か！？」

「大丈夫だよ音兄い。一方通行さんが来てくれたから」

優奈は体を回して怪我がないことを音也に見せた。

そして優奈は一方通行に言われたことを音也に説明した。

「全部はがせばいいんだな？」

優奈がうなずくと二人でコピー用紙をはがし始めた。

S I D E 一方通行

「なんだ？なんだ？なんですか？そのザマはア！！」

一方通行はステイルから放たれる全ての攻撃を反射しステイルにダメージを負わせていた。

「この化け物が…」

ステイルは苦しそうな顔をしながら一方通行に言った。

「だからなんだって言うんだア？化け物で結構！！」

一方通行は石をステイルに向かって蹴り飛ばした。

その石はベクトル操作によって凄まじいスピードでステイルの横を通り過ぎた。

「行けイノケンティウス！！」

しかしステイルと叫びを聞いたイノケンティウスは苦しみ始めそし

て消滅した。

「なん…だと!？」

一方通行はニヤリとした。

「死ねよ三下がアアア!!」

一方通行は足の裏のベクトルを操作しステイルに近づいた。

そしてそのまま拳を放った。

一方通行の拳を食らったステイルは吹っ飛び気絶した。

「準備運動にもならねェな三下」

一方通行はそう言い残しとある実験場に向かった。

S I D E 優奈&音也

全てのコピー用紙をはがした二人は一方通行が戦っていた場所に向かった。

だがそこには一方通行の姿はなく気絶したステイルが倒れていただけだった。

「勝ったんですね。一方通行さん」

「そうだな。それより急ぐぞ」

音也は優奈を引っ張りとする場所に向かった。

とある場所とは小萌先生の家だった。

だが小萌先生の家に向かうと上条が何かを振り切るように小萌先生の家から飛び出した。

しかしそんなことに構っている隙はなかった。

中に入ると何故か怪我をしていたシスターと小萌先生が祈りを捧げるように歌っていた。

そして歌が終わると怪我をしていたシスターの体は完全に回復していた。

「紅ちゃんどうしてここに!？」

「上条が心配で来たんですけど何ですかさっきのは？」

音也は小萌先生に聞いたが本人にも分からなかったようだ。

二人が話している間に優奈はシスターに話しかけていた。

「僕は紅優奈。君は？」

「私はインデックスって言うんだよ」

偽名かなと思しながら優奈とインデックスは友達になっていた。



## 第六話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

楽しんでもらえましたか？

楽しんで頂けたのならば感想をください！！

待ってます♪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5449/>

---

とあるアンチスキルの義理の妹

2010年10月9日03時11分発行